

親 族 と 社 会 組 織

岡田 浩樹

はじめに

I イエと世帯

II 血縁に基づく関係

III 地縁に基づく関係

IV 生業における組織

V 漁業協同組合について

VI おわりに

はじめに

戦後の高度成長、都市化、マスコミュニケーションの発達などが日本の漁村を激しく変動させてきた。また、現在も漁業資源の減少、200 カイリ制の導入など外部からのインパクトは大きいと思われる。

このようなインパクトは漁民の生活の諸側面に浸透している。そして多くのムラはムラとしての秩序がゆるみ、さらにはムラそのものが解体している場合もある。過疎化によるムラの消滅などがその例であろう。

ところが私達が姫を調査した際に第一印象として強く感じられたのは、姫のムラとしてのまとまりであった。

そこでこの報告書では、どのような社会関係・集団が姫にあるかを記述し、ムラのまとまりについて考えてゆきたい。ただし、歴史性、時間による構造の変化については必要最小限にとどめ、現在の姫のムラの状況に限定して記述したいと思う。

構成としては、まずムラにおける伝統的な関係である血縁的、地縁的關係、集まりについて記述し、その後その他の集団と漁協について述べたい。

I イエと世帯

姫における血縁、地縁関係について記述する前に、それらの諸関係における最小限の単位「イエ」について触れたい。

姫においては、血縁、地縁関係は個人と個人の関係というよりもイエ間の関係になる。この場合の「イエ」とは家族的構成の生活集団を意味し世帯と同義である⁽¹⁾。

それでは姫のイエの現状についてふれたい。昭和 59 年 10 月 1 日時点で姫には 1064 名が

表1 人員別世帯数

家族成員数	世帯数(件)	%
1	7	2.9
2	21	8.8
3	31	12.9
4	71	29.6
5	52	21.7
6	30	12.5
7	26	10.8
8	2	0.8
計	240	100
不明	7	

S59年10月1日現在

表2 家族構成 S60 調査分

世帯主	208	100	注 1
配偶者	181	87.0	
1男	125	58.2	
2男	42	20.2	
3男以上	13	6.3	
女子	123	59.1	
子の配偶者	52	25.0	
父母	63	30.3	
孫	91	43.8	
兄弟	2	1.0	
姉妹	5	2.4	
兄弟姉妹の配偶者	0	0	
甥姪	1	0.5	
養子	6	2.9	
その他の配偶者	4	1.9	
祖父母	1	0.5	
同居人	2	1.0	
ひ孫	1	0.5	
その他	6	2.9	
世帯主を100とする%			
	926		

注1 うち女性の世帯主11

注2 うち、孫の配偶者1、甥の配偶者1
養子の配偶者2

表3 同居世代および夫婦別世帯数

S59. 10. 1

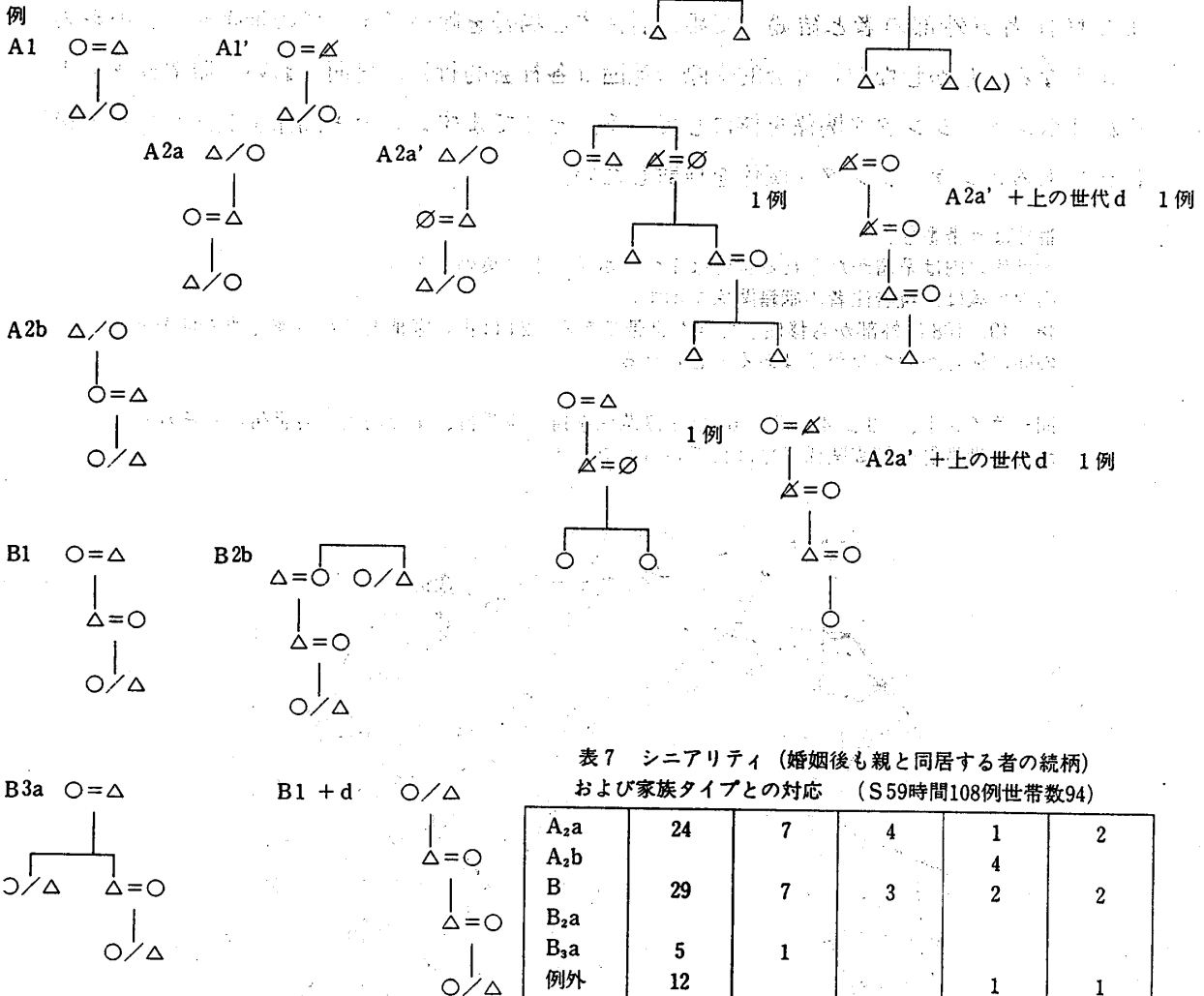
夫婦数	世代数	1	2	3	4	百分率%
0	7	10	2			9.1
1		80	40	2		65.9
2		6	43	3		25.0
3						0

居住し、世帯数は247戸である。世帯の構成は人員別世帯数(表1)によれば4～5人家族が全体の51.3%を占めている。また家族構成(表2)夫婦別世帯数(表3)によれば1世帯あたり夫婦数1～3、世代数は1～2世代同居している世帯が一般的である。家族タイプによる分類(表4)によれば核家族、直系家族が大半である。ここで問題となるのは核家族が直系家族へ移行しようとする過渡的存在であるのか、独立した核家族への志向を持つものなのかという点である。これについては昭和44年に核家族であった世帯がほとんど昭和59年に直系家族に移行しており、直系家族志向の傾向があると思われる。世帯経営については15才以上の家族労働配分によれば、姫の世帯は漁業を生計の中心としている。また農業については耕地が少なく重要な生活手段にはなっていない。姫全体の生業形態としては漁業中心型

といえよう。

表4 家族タイプ（核家族を中心に包括して考える）

A1	核家族	82 (2)
A1'	" 欠損	14
A2a	核家族+上の世代d (夫方)	42 (3)
	このうちBの欠損と考えられるもの	41
A2a'	" 欠損	2
A2b	核家族+上の世代d (妻方)	4
B1	直系家族	37 (3)
B2b	" +上の世代d	1 (妻方)
B3a	" 同世代d	9 (夫方)
B1 + d	+さらに上の世代	5
例外		10 (1)
小計		208
不明		39
全戸数		247
	() 内は養子の数	



II 血縁に基づく関係

姫は血族（親族）関係のネットワークによって結ばれている、といってもよい。（図1）にその状況を図示した。こうしたネットワークの中でムラ人が意識する社会的意味を持った血縁関係には2つのカテゴリーがある。1つは夫方の系譜関係を中心としたホンケとシンタクの関係（以下ホンケーシンタク関係とする）であり、もう1つはシンセキ関係である。シンセキというセテゴリーは、血族、姻族の両方を含み、また「ツキアイがあるイエ」と表現される社会的関係を持つイエのカテゴリーであり、曖昧なものである。2つのカテゴリー（ホンケーシンタク、シンセキ）はかなりの部分で重複している。村内婚、村内分出の多い事から（秦論文表5およびP31参照）、事実上は、姫の外部から移住してきたイエ、また移住者が外部の者と結婚して姫に居住する場合を除いてすべての世帯がシンセキのイエとなる。しかしながら社会的交際の範囲は各社会的行為の場面において限界があり⁽⁴⁾それはホンケーシンタク関係を核にしている。そこでまずシンセキ関係を記述してその後核であるホンケーシンタク関係を検討したい。

番号は世帯番号、

4世代以内は系譜がたどれる世帯は1つのポイントに集めてある。

円内の線は、現居住者の姻籍関係を示す。

48、49、108は外部から移住してきた世帯である。24は古い家柄とされる家で他の世帯との間に何らかのつながりはあると思われる。

同一ライン上、(3、4、5、6)は系譜関係を持つ世帯群、また円内は各世帯群がそれぞれの世帯群と姻戚関係で結ばれているかを示す。

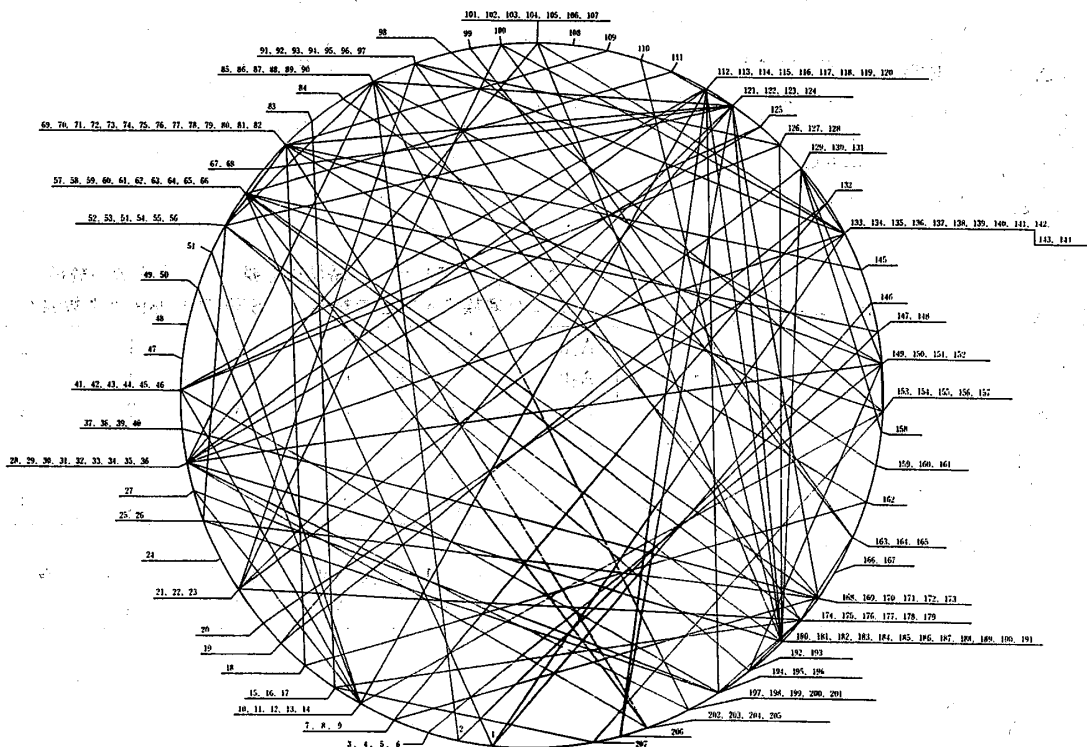


図1 各世帯関係図、S 59、調査分 (407戸)

(a) シンセキ関係

シンセキは社会的交際がある血族および姻族の曖昧なカテゴリーである。世代が交代するとそのイエのシンセキのカテゴリーも異なってくる⁽⁵⁾。したがって成員の資格が定まった永続的集団ではない。シンセキはホンケーシンタクの紐帯を基礎として、社会的行為の各場面で集まる。それは結婚式、葬式、法事などである⁽⁶⁾。結婚式の際には、シンセキと近所の人が集まりオヨバレを受ける。葬式の際にはシンセキと、後述する葬式組の人々が集まる。オヨバレは、ハトコまでのシンセキがまず受け、後に他のシンセキと葬式組が受けるという2段階になっている。法事は30回忌、50回忌が規模が大きく、店い範囲のシンセキが集まる。家の新築の際には、シンセキと近所の人が集まる。菓子、食事が集まった人に供される。また正月に、シンセキ同志のイエが訪問しあう事もある。特に姻戚のシンセキと関係を持つ場合は、出産と、女性のホンケガエリである。出産の際に女性は1ヶ月前後実家に戻るが、婚家に戻る際に乳母車、鯉のぼり、おひなさまなどが実家から近られる。ホンケ帰りとは、61才になった女性が婚出先から実家に行きオヨバレをするというもので、子供や実家のシンセキが集まるというものである。日常のシンセキヅキアイにおいては、親しいシンセキと交際し、女性が主に行なっている⁽⁷⁾。

(b) ホンケ、シンタク関係

ホンケ、シンタクという言葉は、姫において分出したイエをシンタク、分出するイエを出したイエをホンケと呼ぶものである。シンタクから分出したイエはマタシンタクと呼ばれる。また、当代の世帯主が分出した場合は一代シンタクと呼ばれる。マタシンタクは直接のホンケ、つまり分出によって出たイエをホンケという。ホンケは独自の屋号を持つ⁽⁸⁾。また、シンタクでも3代以前に分かれたイエが屋号を持つ事もある。例えばS姓を例にとると、S姓の創始者のイエとされるSホンケ（ジンシロ）があり、ジンシロシンタクと呼ばれるイエが9戸ある。また他にホンケと呼ばれるイエが2戸あり、このイエは現世帯主の3代前にジンシロから分かれたイエである（図2）。各イエの系譜的つながりをムラ人は2～3代前までは記憶している⁽⁹⁾。

ホンケーシンタク関係について記述する前に、この関係に影響を与えと考えられる分出（シンタクスル）について述べたい。姫においてシンタクスルとは、イエの構成員の一部が、独立した生計を営むような世帯をホンケの外に持つ事である。それでは、シンタクするイエの構成員は、ホンケにおいてどのような位置を占めるか、についてまず表7で、親と同居する子のシニアリティについてみる。同居することが、そのままイエの相続であるとは、一般にはいえない。しかし後述するように姫においては、相続財は家屋が基礎的なものであり、親と同居する者は親のイエを継いだ、と考えてよい。したがって表7によれば、シンタクは次、3男が多いと考えられる。姫においては、ホンケは長男が相続

図2 S家系譜

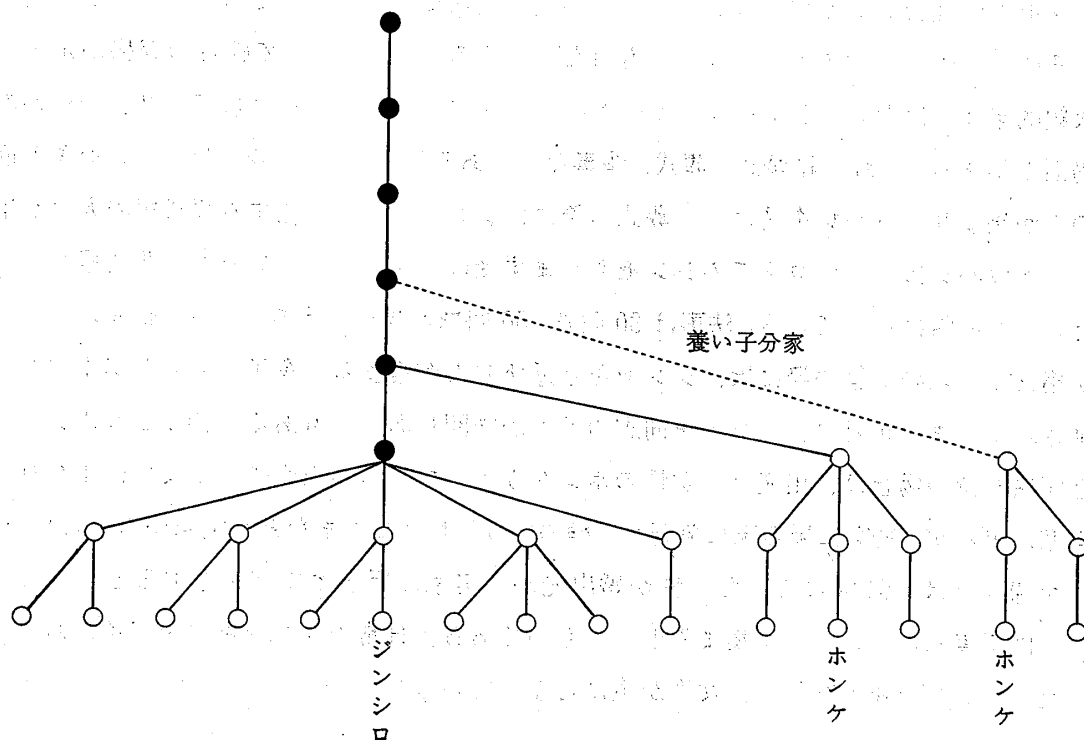


表5 船主と船長及び機関長の続柄

() 内はパーセント

年 度	昭 44		49		54		59	
	船 長	機関長	船 長	機関長	船 長	機関長	船 長	機関長
本 人	1 (3.2)	0 (0)	1 (3.4)	0 (0)	1 (2.8)	0 (0)	2 (4.9)	0 (0)
息 子	2 (6.5)	2 (6.5)	0 (0)	0 (0)	1 (2.8)	0 (0)	4 (9.8)	0 (0)
娘 の 夫	0 (0)	0 (0)	2 (6.9)	0 (0)	1 (2.8)	0 (0)	2 (4.9)	0 (0)
兄 弟	4 (12.9)	1 (3.2)	1 (3.4)	2 (6.9)	3 (8.3)	3 (8.3)	1 (2.4)	1 (2.4)
姉妹の夫	1 (3.2)	2 (6.5)	1 (3.4)	1 (3.4)	3 (8.3)	0 (0)	1 (2.4)	0 (0)
甥	0 (0)	2 (6.5)	0 (0)	1 (3.4)	1 (2.8)	1 (2.8)	2 (4.9)	0 (0)
孫	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
妻の兄弟	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (3.4)	1 (2.8)	1 (2.8)	2 (4.9)	1 (2.4)
従 兄 弟	0 (0)	2 (6.5)	2 (6.9)	3 (10.3)	3 (8.3)	4 (11.1)	4 (9.8)	2 (4.9)
そ の 子	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (5.4)	0 (0)
シンセキ	3 (9.7)	3 (9.7)	2 (6.9)	1 (3.4)	3 (8.3)	0 (0)	2 (4.9)	0 (0)
関係なし	20 (64.5)	19 (61.3)	20 (69)	19 (65.5)	19 (52.8)	27 (75)	20 (48.8)	35 (85.4)
不 詳	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (4.9)
合 計	31	31	29	29	36	36	41	41

する事が普通である、とされる。

しかし現実には厳しい拘束力はない⁽¹⁰⁾。また、長男および他の男子がいない、あるいは彼らが相続をしない、という場合には、非血縁者であってもイエの存続が優先する⁽¹¹⁾。こうした形の相続は、「リョウモライ」といって養子に嫁をもらってイエを存続させるものである。イエの世帯経営は、子が妻帯し、自立できるようにになると、世帯主が「ゴテ渡し」といって子に譲られてゆく。

分出のタイプとしては、かつては3つの分出のタイプがあった。

1. ホンケ継承者以外の子がシンタクを形成
2. 養い子シンタク
3. インキョシンタク

2の養い子シンタクについて若干の説明を加えたい。姫にはナヤオトコ、養子、ヨボシコ⁽¹²⁾と3種類存在した。ナヤオトコは、農村の作男に類したもの

表6 姫船乗組員出身地別（昭. 59）漁協資料による

町 村 名	部 落 名	.99t	.59t	.49t	99 t以上	計
能 都 町	姫	64	11	6	12	93
	真 脇	19	10	0	3	32
	宇 出 津	22	5	1	6	34
	小 浦	1	0	1	0	2
	羽 根	0	1	0	0	1
	藤 波	0	0	0	0	0
	波 並	0	0	0	1	1
	そ の 他	1	0	1	2	4
内 浦 町	小 木	31	12	3	19	65
	越 坂	4	2	0	2	8
	新 保	1	0	0	0	1
	布 浦	5	1	0	5	11
	市 之 瀬	2	1	0	0	3
	そ の 他	3	0	0	4	7
珠 洲 市	珠 洲	9	0	1	7	17
	正 院	0	0	0	0	0
	鶴 飼	0	0	1	0	1
	そ の 他	0	0	0	0	0
輪 島 市		10	1	2	0	13
七 尾 市		0	1	0	0	1
穴 水 町		1	0	0	0	1
中 島 町		0	0	0	0	0
他の能登		1	0	0	0	1
他の石川県		0	0	0	0	0
北 海 道		10	1	1	5	17
他 県		13	4	1	10	28
不 詳		1	0	0	0	1

で、人手不足の際に後背地の農村から次、3男を移住、同居させ、仕事を手伝せる事を目的とした。成人して嫁をもらう際に、そのイエの姓を名のらせ⁽¹³⁾、シンタクをさせたもので血縁関係はない。養子は、これに対して近親者の子である場合が多く、イエを継承させる事を目的とした。ヨボシコには2つの場合がある。一方は、イエに子がない場合に他のイエの子をそのイエの子として扱う、他方は富裕なイエに貧しいイエの親が富裕なイエの子として育てて欲しいと頼む場合である。この場合ヨボシコは生家のイエを継ぐ。例えば、海産物商であったT家と、D家の場合をみる。T家に子がなく、D家の親とT家の主人とツキアイがあり、T家の力になって欲しいという事で、Dの子が呼子となった。この

時にDの子は、TからT家の紋がついた羽織、袴をもらった。後にDの子はD家を継ぐが、T家をささえる力添えをした、というものが前者の例である。

姫では納屋男とヨボシゴは社会的地位が異なっていた⁽¹⁴⁾。

呼子は2つのパターンのうち、前者が長男と同格であり、兄弟として相談される。後者は納屋男よりは高いが、前者よりも地位は低い⁽¹⁵⁾。納屋男はイエによっては玄関から出入りできず脊戸（勝手口）から出入りしなければならなかった。またホンケ、他のシンタクに対する発言力も弱かった、とされている。このうちシンタクを形成するのは納屋男である。

現在はヨボシゴ・納屋男とも行なわれていない。養子のみ行なわれている⁽¹⁶⁾。またインキョシンタクについては、ゴテ渡しをしたオヤがシンタクをもつものであるが、現在は行なわれていない。シンタクとしては1のタイプのみ行なわれている。

シンタクは結婚に際して行なわれている。姫では「イエを建て、ヨメをもらってシンタクする」と言われている⁽¹⁷⁾。シンタクする際には家屋敷、山、耕地の分与はホンケの義務ではなく意志によっている。「シンタクする事はホンケにとって迷惑だ」という発言は姫にみられなかった。逆に「シンタクは男の甲斐性」という言葉すらある。ムコ養子、養子がシンタクする事も自由に行なわれている。シンタクに際して、ムラに対し披露したり挨拶する事もない。またシンタクの敷地選択は自由である。ムラでシンタクを制限する事はなかったようである。

ホンケとシンタクの集まりを指す言葉は姫にはない。また、ホンケとシンタクだけで集まる事もないし、共同の祭儀を催す事もないようである。祭儀の場（結婚式、葬式など）には、シンセキや近所の人々も集まってくる。ホンケとシンタクの間の助け合いについては、シンタクが困っている場合、例えば夫が死亡し、その子が幼い場合にホンケから若干の援助が行なわれる⁽¹⁸⁾。また逆にホンケがシンタクから助けられる事もある。しかし一般的に、ホンケとシンタクの助け合いは個別的であり、日常的な交際の程度にとどまっている。ホンケとシンタクで共同の財産を持つ例はなかった。マタシンタクは直接のホンケの方が元のホンケより紐帯が強い⁽¹⁹⁾。また、これらの系譜的広がり序例ではなく、世代を超えて継続していない。ホンケとシンタク間のヨメのやりとりは行なわれている⁽²⁰⁾。そしてホンケとシンタクの違いによるムラの中での発言権の違いはない⁽²¹⁾⁽²²⁾。

以上シンタク、ホンケーシンタク関係について述べた。ここで、姫におけるこれらの関係がどのような意味、機能を持つかまとめてみる。社会的関係を集積しても、それが機能化された集まりになるとは必ずしも言えない。姫のホンケーシンタク関係、シンセキ関係は以下の点から機能を持つ組織、例えば農村における同族集団のようなものは形成していないと言える。

- 1 地位、役割の分化が明確ではない。
- 2 共通の利害、関心がホンケーシタク、シンセキの範囲で限定されていない。
- 3 各イエの行動をホンケーシタク、あるいはシンセキ関係が規制しない。
- 4 経済的、社会的に成員の定まった永続的集団ではない。したがって血縁関係においては、各イエは独立し、比較的平等であり、ホンケーシタクおよびシンセキ関係は社会的実体としては存在するが組織的集まりとしては成立していないといえよう。前述したように、姫には親族、姻族関係のネットワークが広がっている。それは、ムラの連帯、共同意識になんらかの支持を与えていると推測をされる。しかし、血縁関係に基づく集団が、その中心的な存在であるとはいえないであろう。

III 地縁に基づく関係

ここでは地縁的な関係について記述したい。まず最初に共同労働慣行と相互扶助についてふれ、次に地縁的単位としての姫区、そしてその他の諸集団について記述する。

(a) 共同労働慣行と相互扶助

かつて姫にはエイと呼ばれる共同労働慣行が存在した⁽²³⁾。エイが行なわれたのは農作業、山仕事、井戸の修理などである。それぞれの場合によって集まってくる人々の関係、範囲は異なっていた。農作業は田を所有するイエ同志がエイを行なった⁽²⁴⁾。山仕事は、姫はムラの山がなく、町内の6～7人のグループが山の本々を共同所有し、この山をナカマヤマと呼び、エイで山の下草刈りを行っていた⁽²⁵⁾。個人で山を所有する者は、他の所有者や、シンセキとエイで作業を行った。シンセキには木を報酬に与えていた。共同の井戸は、それを使用する者が集まり、エイで修理を行った⁽²⁷⁾。家の新築の際には、シンセキおよび近所の人が集まり助けた。その他には、結婚式、葬式にシンセキ、近所の人が集まり料理などを作ったり、準備をしたようである⁽²⁸⁾。現在、エイは行なわれていない。ただし、葬式の際には、姫全体を1～6組に分けた葬式組が協力しあうという形で残っている⁽²⁹⁾。

(b) 区

姫は行政的単位としては小字にあたり、全体を1区としている。区は3組に分割されている。すなわち向浜、中組、幸港である。かつて中組は東手、西手と2つの組に分かれていたが、他の2組の世帯増加の結果、バランスをとるため5年前に合併した。中組の東手は姫発祥の地であるとされ、比較的古いとされるイエが多い。また向浜には海岸埋めたて後建てられた新しいイエが多い。しかしながら、生業、生活空間、社会的にこの3つの組の間に著じるしい違いはない。

姫全体としての区には区長がいる。区長の任期は2年とされる。しかし交代することはあまりなく、長期間同一人物が任につく。現区長の前任者は15年間務めている。交代しない理由として現区長のH氏によれば、「区長の仕事は面倒でやりたがる人がいない。また漁に出ている人はできないためもある。」と述べている。区長は、前区長の依頼した者になる。区長になる条件として、1 漁に出していない、2 信頼があり、面倒見のよい事、をH氏はあげている。区長の下には3人の組長がいる。組長には任期はない。

区長の仕事は祭の計画実行が主であり、神社の管理を行う、また能都町行政の伝達も行い、町の区長の集まりに出席する。「区と町行政のパイプ役」とH氏は語っている。

姫区として全戸が集まることはなく、定期的な組の会合もない。この理由としてH氏は「男は漁に出ているし、女は網仕事で忙がしいためだ」と述べている。区の活動の財源としては、会費のようなものはなく、神社への寄附金に頼っている。

ここで、区の活動として最も重要な祭についてふれたい。姫では諏訪神社の大祭であるドウヤサ祭りがある。これは漁の安全、大漁祈願をするもので、かつては10月の秋祭、6月のエビス祭と2回あったが⁽³⁰⁾、北海道へのイカ漁の開始から7月5・6日に行うようになった。1日目のヨイマツリには、キリコという木で組んだ上に和紙を張り、武者絵などの意匠を揃えたものを船にのせ、夕方からキリコの内部に灯をともし、浜を航行させる。翌日、ホンマツリの日、昼すぎにキリコを陸にあげ、20人程度でかつぎ宮に行き、神主の祝詞を受ける⁽³¹⁾。宮にいくまでに各地区をねり歩く。祭の組織としては、総代が区長を含めて13名いる。うちわけは、中組4名、幸港3名、向浜5名である。キリコは組ごとに2台で、全体では6台製作する。それぞれのキリコについては、組長がリーダーシップをとって製作する。各世帯、1人は作業に従事する。準備に要する期間は約1週間、材料費は各戸3000円を出す⁽³¹⁾。14~15年程前までは、祭は盛んであった。各地区で対抗意識を持ち、子供、青年、老人の役割も決まっていた⁽³³⁾。また各戸オヨバレと行なっていた。しかし、近年キリコは小型化し⁽³⁴⁾、車輪をつけてひかれるようになり、オヨバレもなくなっている。さらには祭自体が中止になる事もある⁽³⁵⁾。この事については「漁期が変わり男性が7月に姫に不在であり、女性と子供中心の祭りになった上、人手が不足したために中止した。」と、H氏は説明をしている⁽³⁶⁾。

(c) 青年団、老人会

戦前は17~20才までの独身の男女が集まり活動をしていた。決まった家に集まる事もなかった。現在は消滅している⁽³⁷⁾。

姫の60才以上の老人の集まりである。年に1回旅行などを行っている。

(d) その他

次に本来は宗教的集まり、その他に入れるべき集まりについて記述する。これは地縁的

集まりとは別のカテゴリーに入るものなのであるが、便宜上ここに記述した。

ア 寺の講

姫のイエは9ヶ所の壇家寺(松岡寺、覚照寺、上日寺、善光寺、長願寺、法融寺、蓮光寺、願成寺、因念寺)に分かれている。9の寺はいずれも姫にはなく、松波、宇出津、真脇、小木などに散在している。宗派は浄土真宗と真言宗である。寺には一般信者の組織である講がある。真脇の上日寺の講を例にとると、姫からは25世帯が参加し、講の1組となっている。他の真脇の3組と輪番で講を行なっている。1年に2回当番が回ってくる。1年の講は、3月の彼岸、4月21日、8月、9月彼岸、10月18日祠堂法事、11月に催される。祠堂法事とは死んだ人への供養である⁽³⁸⁾。参加者は主に女性である。集まって食事を一緒にする。このような講が姫にはあるが、姫の各イエは各寺に分かれ、他のムラの人も講に参加するためムラの集まりといえないであろう。

イ 頼母子講

かつて頼母子講は盛んに行われていた。各参加者が一定の金額を出し、順に全額を受けるというものであった⁽³⁹⁾。しかし、漁協が頼母子講をなくそうと努め⁽⁴⁰⁾、また昭和6年に漁協の互助金ができるまでから消滅していった。

以上をまとめると、姫における地縁的な集まりは、ムラにおいて大きな機能を持った組織としては存在していないといえる。それは以下の理由による。

- 1 共同労働慣行、相互扶助とも現在ほとんど消滅している。またかつて行なわれていたものも個別的な関係が主であり、ムラ全体をカバーしていない。
- 2 区には2つの社会的機能がある。それは(i)行政的機能(ii)宗教的機能である。(i)については能都町行政の最末端機関であり、町の行政決定事項を伝達している。しかし、ムラの意味を代表する手段はなく、ムラに対する区長のリーダーシップも小さい。(ii)については、現在祭の存続が危ぶまれており、祭がムラのまとまりの契機であるとはいえない。
- 3 その他の地縁に基づく集まりは、現在消滅しているか、あってもその機能は小さい。

また、寺の講、頼母子講については3と同じ理由によって同様の事がいえよう。

IV 生業における組織

次に姫のイカ釣り漁業という生業における漁労組織が、何らかの機能をムラで果たしているかについてここで検討したい。特に船主と船員(船子)の関係について記述する。

イカ釣りは4~12月が漁期であり、漁場は北海道沖合、日本海沖合である。現在、姫船

籍の船(99 tクラス)は41隻である。1隻には6名が乗船する。船員の船における地位は船長(漁労長)―機関長―甲板員の序列になっている。船長と機関長は幹部といわれる。船主は漁船の所有者であり、船長として実際にイカ釣りに従事する場合もある。姫には現在、99 tクラスの漁船の船主は15名いる。船長は国家資格が必要である。また船長は漁の出来を左右するといわれ、最低15年イカ釣りをした者でないと勤まらなるとされている。船員に対する利益の配当は、甲板員を1.0人分として船長1.7人分、機関長1.5人分払われるのが平均である。また通信士に0.1人分、甲板長に0.1人、操機長に0.2人分と職務に応じて加算される。配当の比率は漁協が仲介して船主と船長の間で決められる⁽⁴¹⁾。経験、年齢による配当の差はない⁽⁴²⁾。不漁の際には一定の金額が船主から船員へ最低保障として払われる。

船主と船員の関係を、まず表5において血縁関係の点からみてみたい。役職者=幹部と船主の関係は、船主に対して血縁者である場合が39例中14例ある⁽⁴³⁾。シンセキまで含めると39例中19例となり、ほぼ半数が血縁関係がある。これに対して機関長と船主の間には41例中35例が血縁関係を持たず、船長に比べると機関長は血縁関係が薄い傾向にある。一般の船員については、井倉論文表9参照にみられるように、姫以外の地域の出身者も多く船主との血縁関係は薄い。また地縁も同様に薄いといえよう⁽⁴⁴⁾。船員は船主が選ぶが、船員もよりよい待遇、より高い配当を求め、乗る船を代えてゆく⁽⁴⁵⁾。その事に関して船主は干渉を行なわない。また船主も不漁であった場合に船員を代えてゆく⁽⁴⁶⁾。船主が船員を選ぶ際には血縁よりも能力が重視される。他の船員、船主の評判、推薦も大きな要素である。ただし同程度の能力であれば少しでも血縁、地縁のある者を選ぶ意識はある。船員の契約は漁期ごとに更新され固定していない。

ムラ生活における船主と船員の関係を次にみてみる。一般に船主は船員の面倒をみるといわれている。漁期の終了後、船主の負担で船員への慰労会が催される。かつては正月に船主が船員を自宅に集め、オヨバレをさせたが現在は行れていない。船員の結婚、出産、また船員の家族の葬式には祝儀、香典が船主から出される⁽⁴⁷⁾。船員の家族に対しては船主が前借りに応じたりする。しかし、特に船主が船員の家族の面倒をみる義務もなく⁽⁴⁸⁾、また船員の家族が船主に対して義務をもつ事もない。船主の網縫いを船員の妻が手伝う場合にも賃金が払われる。船員同志が集まる機会もない。船主には船員からなった者も多い。逆に船主が船を手放した例もある。

姫の漁労組織における関係は、以上の記述から、契約的で、能登地方の他の地域にみられる網元―網子関係に比べるとゆるやかな関係であるといえる。また漁労組織そのものはムラ生活に直接には関係していないといえる。その理由として以下の点がある。

1. 船主が船員に対して経済的、政治的支配力を持たない。
2. 船員の移動のため、1人の船主の下で集団を形成しにくい。

3. 船主と船員の関係は漁業においてのみの契約的な関係である。そのためムラ生活に船主—船員の関係が影響しにくい。

4. 姫以外の出身の船員が多い。また、姫全体を船主—船員関係がカバーしているとはいえない。

5. 船主であるイエは、数世代続いている場合もあるが「腕しだいで船主になれる」といわれる事からわかるように身分上の階層として固定されていない。

以上の点から判断できる。

V 漁業協同組合について

これまでの姫の血縁に基づく関係、地縁に基づく関係、その他の諸集団、関係について記述してきた。結論として、それらのものはムラにおいて大きな機能を果していないといえるであろう。そこで次に漁業協同組合について記述したいと思う。漁協は本来、漁業従事者の利益を目的とする組織である。しかしながら姫においては、漁協がその機能以外にムラに対して活動を行なっているように思われる。そこでこの章では漁協とその組織がどうムラと関わっているかについて記述したい。

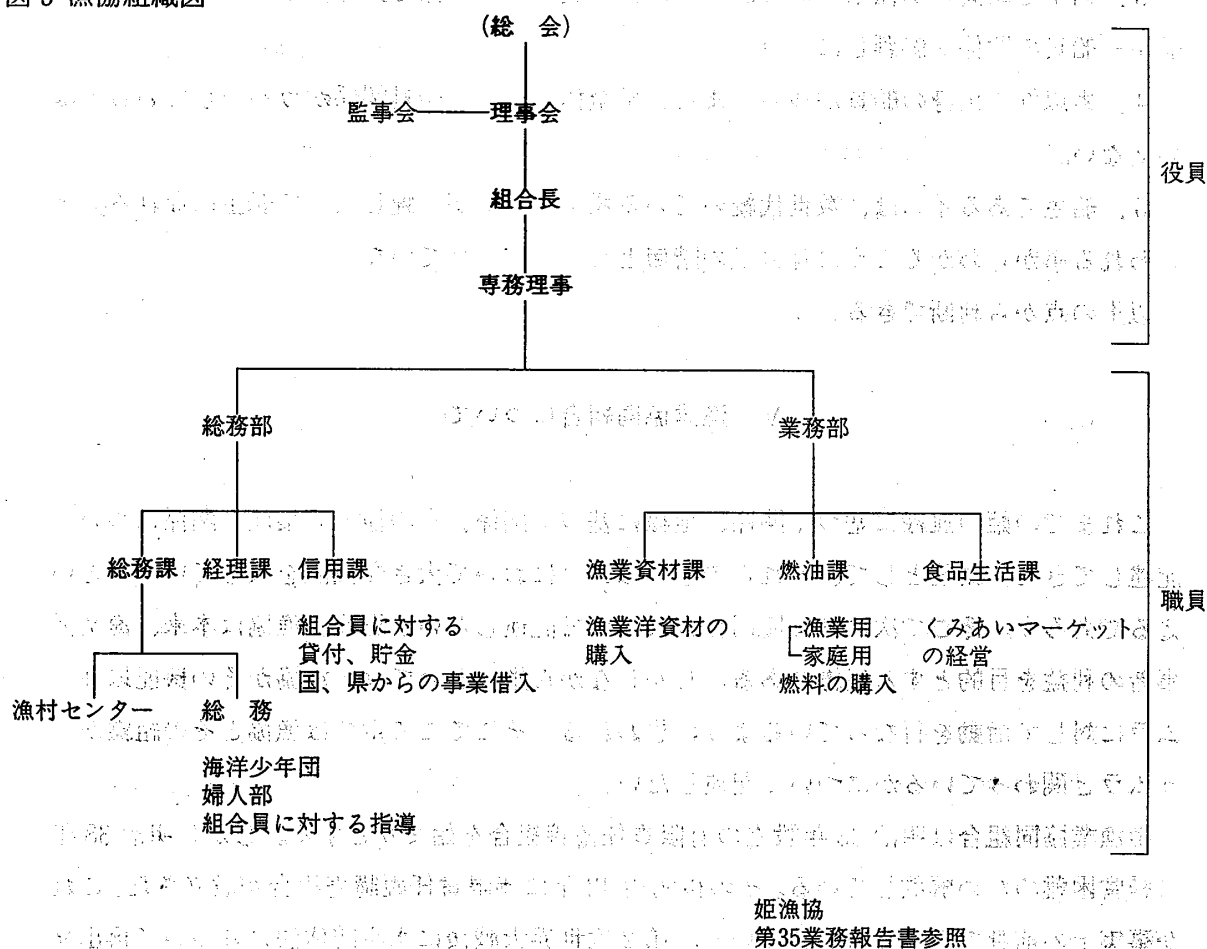
姫漁業協同組合は明治 33 年設立の有限責任徳譲組合を始まりとする。しかし明治 38 年に経営困難のため解散している。その後明治 42 年に無限責任姫購売組合が設立され、これが事実上の前身であると言われている。第 2 次世界大戦後に水産団体法に基づいて再出発し現在に至っている。現在の組合員数は 268 名、また準組合員数は 38 名である。組合員資格は姫に住所を有して 90 日以上漁業に従事する者が原則として持つのだが、準組合員として適用される場合、例えば、父親が漁業に従事していたが死亡し、息子が学生である場合には準組合員として組合のサービスを受ける事ができる。姫の世帯は組合員ないしは準組合員を 1 人あるいはそれ以上構成員に持っている。漁協の組合機構組織は図 3 のようになる。総会は毎年 2 月 28 日に開かれ、これは一般の組合員、準組合員が参加する。理事は現在 11 名であり、船主かあるいはかつて船主であった者である。理事会において漁協の方針について決定する。監事会は業務報告を監査する。

それでは次に漁協とムラの間を各側面に分けて記述したいと思う。

(a) 経済的側面

漁協と姫との経済的側面の関係をまず生業においてみてみたい。姫の各世帯は、イカ釣りという漁業を生業としているために、共通の外からの影響を受ける。例えばソ連領である歯舞、色丹、国後近海での操業は漁船がソ連監視船に捕獲されるという事件を招いている。またイカの水揚げ量の減少から、農林省が全国のイカ釣り業者に対して減船による漁船の割当制の指導を行っている。こうした国家レベルの政治的、経済的問題に対して、

図3 漁協組織図



姫の漁民は漁協の代表者を漁連に出じ対応している。そして漁協は、国に対して領海侵犯に問われた抑留者の釈放を求めたり、他地域の割当分の漁業権を買い取り姫の漁業者に与えるなど、姫の漁民の代表として成果をあげている。またその事によって漁協は漁民の信頼を得ている⁽⁴⁹⁾。現在姫は町会議員を能都町に対して選出していない。これについてあるインフォーマントは、「町に代表を出しても仕方がない。姫の事はもう少し上のレベル、国や県に漁協が圧力をかけているからいい。」と、述べた。このように漁協は姫の漁民の利益代表となっている⁽⁵⁰⁾。

次に姫のムラ自体と漁協との関係のみてみたい。漁協は漁具用倉庫の建築など漁業用の設備充実を行なっている。各船主に対しては漁獲物の取り扱い、漁業用器具の購入などを行う。特に器具に関しては漁協が製品を審査してメーカーを指定する。また新しく開発された漁具に関する講習会も行う。各船主の利益は漁協にプールをされる。そして船員に対する利益配当の比率も漁協が仲介して決定する。また船主の事業計画への融資を漁協が行い、その際に各船主の計画をコントロールする。各世帯に対しては、配当による収入が漁協にプールされる。貯金の奨励運動を通して各世帯の貯蓄は漁協にプールされており、ま

た結婚、新築その他の出費に対しても融資を行なう。したがって各世帯の経済状況は漁協がある程度把握しているといえよう⁽⁵¹⁾。また、生活物資がくみあいマーケットを通して購入され、各世帯の生活における消費にも関与している⁽⁵²⁾。

(b) 社会的側面

漁協の下部組織として漁協センター、婦人部、海洋少年団が特にムラの社会生活に関係している。漁協センターは組合員の福利厚生を目的としたものである。漁協の会合の場として、また各種グループ活動の場に使われる。例えば、後述する婦人部の活動、PTAの会合の場などに使用される。もう1つの目的として、老人福祉の機能も持っている。週2回、センターの浴場が開かれ、老人が集まり入浴できる。その他、保健所、役場の健康相談、選挙の演説、投票などもセンターにおいて行われる。また、付属する図書室を一般の人が利用できる。いわばこのセンターは、漁協が行政サービスを行う場所であり、またムラのコミュニケーションの場にもなっている。婦人部は主婦を中心とした女性を組織しているもので、体育、ボランティア、広報の3部会に分かれてムラに定着した活動を行っている。組織としては、会長、副会長、顧問(男性)、班長6人、役員20名からなる。主な活動としては、子供の教育、研修旅行、新年会などの他、水道、国民年金の支払い、盆踊り、海岸の清掃なども婦人会が中心となって行う。また、50才未満の会員が構成する婦人防犯隊が組織されており、消防、青少年健全育成を目標に活動している。漁期の間は成年の男性が不在である姫にとって、婦人部の活動は重要なものである。例えば、漁協が生活改善を指導した際には、婦人部が申し合わせによって結婚、葬式の簡略化を決め実行した⁽⁵³⁾。生活におけるいわゆるムラの意見を実行する中心になっているといえよう⁽⁵⁴⁾。海洋少年団は漁業後継者の育成という目的で漁協職員が小学5年～中学上級の少年を組織している。加入は強制されていない。手旗訓練、カッター競技などを行なっている。青少年非行防止の目的もあり、子供に対するムラの教育といえるかもしれない。

(c) 行政的側面

漁協は行政機関の代用も果している。内部に対しては漁協センターにおける福祉活動、生活環境の整備、各世帯に対する税務指導などを行っている。また、能都町行政において伝達は前述した区長が行っているが、公文書の代筆・代理、選挙の演説、投票の場の提供など実行は漁協が行っている。外部に対しては、ムラの意見を代表する組織として機能している。簡易水道の建設、地域内の道路建設、海岸埋め立てによる宅地造成など、本来は能都町が行う事業である。しかし、形式的には能都町が行うことになっているが実際の計画、実行は漁協が中心となって行っている。

以上、漁協の組織と活動について記述してきた。漁協に対するムラ人の態度として「漁協を中心に姫はまわっている。」「漁協はなににもかも押さえている。」というコメントがあった。

結論として現在の姫のムラとしてのまとまりを形成する主たる関係、組織は漁協であるといえよう。それは次の理由によっている。

1. 漁協は姫のすべての世帯をカバーしている。
2. 漁業という共通の関心に対して有効に機能している。
3. イカ釣り漁業は、全体的には外部の要因に左右され、ムラ全体としての対応を漁協が行っている。
4. その対応の過程でムラの成員への制約、例えば生活改善の指導などが漁協を中心に行なわれた。
5. さらに金融面を漁協が握る事によって、姫全体が1つの生産組織のようなものになっている。
6. 1～5の結果と血縁、地縁の組帯に対する感情が加わり、ムラ的に共通の感情（一体感）が生まれている。
7. 6の共通の感情において、漁協のセンター運営、あるいは婦人部の活動が行なわれ、それがフィードバックされて、漁協を中心とする姫のムラとしてのまとまりを強固にしている。以上の諸点による。

6に関しては、1～5の原因の結果とはいえないかもしれない。例えば祭が過去において現在よりも大きに意味を持ち、一体感を生む契機となっていたかもしれない。しかし、現在の姫において、漁業とその中心となる漁協の活動は、ムラ生活とフィードバックしながら一体感を生みだしていると考えられる⁽⁵⁶⁾。

以上を要約すると、VIのおおわりには、この報告の最終結果が、姫のムラとしてのまとまりの中心が漁協である、という結論は、経済的分析や構造の

変換の分析を行う事により明確になるであろう。仮説として私が考えるのは次のものである。

姫の漁家は個々に独立した経営単位である。しかし、沖合イカ釣り漁業という共通の生業、また外部の経済動面に共通の影響を受けるといふ経済的性格から相互に関係を持つ経営群を成している。こうした経営群は内的には相互に競争し⁽⁵⁶⁾、生産単位としての独自性、経営の自主性を持つ。しかし姫全体としては、共通の外的状況、例えば漁場における資源の減少、流通経路の変化、漁業機材の発達などによって生産が規制される均質な経営組織としての経営群を構成している。その経営組織の中心を成すのが漁場といえるであろう。

明治初期からの他地域からの移住によってムラとして形成された姫においては、血縁、地縁を基礎としてのムラ組織が未発達であった⁽⁵⁷⁾。沿岸漁業が困難であり、耕地も少ないため網元―網子関係のような凝制的親子関係が強固な力を持たなかった。そこには地先の共同漁業権を持たない事と、現実の漁場行使が自由であった事から、船主―船子のような

資本の論理が実行した。こうした状況は、船主の下に血縁、地縁関係を基礎として船子を組織し、事実上は歩合制賃金労働者である船子を参加させる擬似共同経営であった。戦後、漁業制度改革を契機とし、また不況期の状況打解の方血選択のなかで漁協が資本を握り、主導権を持った⁽⁵⁸⁾。このような過程の中で、経済的機能を中心に、漁協が個々の世帯を統合し、さらに不況期において社会的な面までに深く関わっていったのであろう。

漁協がこれからも姫のムラのまとまりの中心である事ができるかについては、私は問題をいくつか乗り越えなければならぬと感じる。それは外的状況の影響をどこまで漁協が対応できるか、という事である。戦後、漁協が問屋との関係を切った事に代表されるように、外部資格の侵入を姫内の船主を中心とする中小資本家の資本を漁協に蓄積する事によって抑えてきた。しかし、漁獲量の減少、200 カイリ制の導入、船の建造費の高騰によって、船主層は動揺している。このような生業における変化は、漁協を中心とする経営組織としての経営群を、動揺させ、あるいは漁業から転業していく世帯も出るかもしれない。そうした場合に緊密な生活上の関係を保つ事は困難になってくる。また、漁業でのいきづまりは、労働力の流出→過疎化という農村のたどってきたプロセスを招く可能性もある。いずれにしても、これからの漁協の方向選択が成功するかがポイントとなるであろう。

注

(1) 原忠彦、末成道夫、清水昭俊 1979、『仲間』弘文堂、P 21 の家族に関する定義の 3 にあてはまる。さらにイエとはその成員である家族の集合を表わすとともに、居住している家屋によって象徴される永続的存在、かつ基礎的社会集団であるとする末成道夫の説（P 142、以下）をここでは用いる。

(3) 「シンセキにはうすい、こいがあるが、一般的には差はないつきあい」

(4) 「シntaxのシntaxなどはめったに（葬式などに）よばれない。助け合いもうすくなる。」

(5) 「K、Yさんのことは私の実家Kと血はつながっていない。Kという名をもらったようだ。シンセキつきあいにする。」これは、納屋男による擬制的親子関係の例である。

(6) 「漁協の生活改善運動により結婚、葬礼その他の簡素化が進められオヨバレをうける範囲も小さくなった。」

(7) 「珍しいものをいただいた時にシンセキに配るとか、子供に駄賃をやる程度」

(8) ロクサブrow、マタベ、ショウベサ、など

(9) 姫においては、5代以前にシntaxした家はなく多くはシntaxして1～2代した家である。

(10) 長男が県外に出て、次男がイエを継ぐ場合もみられた。長男がイエを相続する事は強い義務とはなっていないようである。

(11) 「後つぎは大切であって養子をとった。」

(12) ナヤオトコに納屋男、ヨボシゴに呼ぶあるいは烏帽子子という漢字を用いる人もいる。

(13) そのイエの姓を名のらせる場合のほかにナヤオトコの姓をそのまま名のらせる場合もあった。

(14) 「慶弔の席ではナヤオトコは実子よりあとにすわる。子供、兄弟、ナヤオトコの順にならぶ。」「一人前のシntaxとしてナヤオトコは長男と同格、兄弟として相談」

(15) ヨボシゴの後者の例の場合、明確な例は今回の調査では見い出されなかった。

(16) 「昭和 10 年ぐらいまではナヤオトコはいた。それから沿岸の漁が少なくなってきたので、ナヤオトコもいなくなった。」

- (17) 「漁獲量が増加するとシントクが多くなる。以前（不漁の時期）は同居していたのかなあ。」
- (18) 「他のイエとの特別な相互扶助はない。実家とはホンケが少し助けてくれるくらい。」「夫が死んだシントクの妻子にはホンケが助けた。米や野菜をやった。ひきとって育てる事はしない。養子にもしない。」
- (19) 注(4)を参照。
- (20) ホンケの長男がシントクの長女を嫁にし、シントクの長男がホンケの長女を嫁にする例があった。このシントクはその長男の3代前に分かれたイエである。
- (21) かつてはあったと述べる人もいる。またここではふれていないが、結婚において家格のつりあいが問題になる、と述べた人もいた。(家柄がちがう)「敷居が高くてよこぎれん。」という言葉で表現される。しかし、厳しい制約とはなっていない。
- (22) ホンケとシントクの違いについては、ホンケの方が交際の範囲も広く、費用もかさむという事がある。「(結婚の祝儀などに)シントクが2〜3万のところホンケは5万出さねばならないので大変である。」
- (23) 「エイというのがあった。これは一軒ではできないことをまわりの人があつまってお互いに助け合った。5〜6軒から多い場合は10軒くらい。」
- (24) 「田んぼの仕事はお互いにエイをする。例えば今日はUさんのところ明日はHさんのところ、というように」また、水田の所有者だけではなく他の人に頼むこともあった。「エイは田んぼもちの家どうしでしたり、また田んぼをもっていない人にたのむこともある。これらの人々にお礼としてお金、わらなどを払う。シントクもホンケの田の仕事を手伝う。そのかわりお金などをもらったりする。」
- (25) 「町内のグループが6〜7人で山を買った。それで、みんなで行って春まきをとってつんでおく。ナカマヤマと呼んだ。」
- (26) また、金を出してまきを手に入れる場合も多かったようである。
- (27) 昭和10年ごろには2ヶ所の共同井戸があった。
- (28) 魚などを積む作業、またイカ、魚を干す作業もエイで行なった。網修繕は賃金を出して行なっていたようである。
- (29) かつて葬式の際に近所の者とシンセキが行なった事は次のものである。食事の用意、墓穴、薪の準備、またカンオケを町内の隣り近所の人でミコシのように担いで墓地まで運んだという。
- (30) 祭礼は年4回あるとされる。春4月12、13日、ミコシが出る。夏7月6、7日。秋10月15、16日、かつてはキリコが出たが現在は中止。冬12月6、7日新嘗、町内ごとに代表を選んで宮参りがされる。
- (31) これをションバライ（アクバライ）という。
- (32) かつては家ごとに差があったが統一された。しかし現在でも船主、船長は多く出す事が暗黙の了解になっているようである。また各戸への割当金をカットウ「割当」という。
- (33) 「子供が学校を早退して絵をかき、スミ塗りなどを手伝った事もあった。」
- (34) 「人手不足と電線にひっかかるという理由で小型のキリコを作るようになった。」また、かつてはキリコの絵は姫の人が描いていたが現在は本職に頼む。そしてキリコ本体も、かつては始めから作ったが現在は、面と枠の所だけ作り、他は保管してある。
- (35) 昭和59年の祭は中止になった。
- (36) かつては姫のドウヤサ祭は規模が大きく準備期間も1ヶ月とされ、ムラにおいて祭礼組織は何らかの機能を果たしていたと推測される。
- (37) 青年団がいわゆる年齢階梯制の名残りであるかについては不明である。

(38) 講は主に壇家の女性が参加する。当時になった組は、寺の清掃をし、食事を作る。参加者は米か金を持参し、30分オツトメをしたあとオヨバレをする。祠堂法事は観音様の日とも呼ばれ、近隣13ヶ寺から僧侶が呼ばれ(エイの形)、亡くなった人の5~10年の供養が行なわれる。6年位毎に(大涅槃と土砂加持法会)の2代法会が多なわれる。これは13ヶ寺のうち2ヶ寺が順に毎年行うためである。上日寺の壇家は姫に25戸、真脇に60戸ある。

(39) 集まった金で各戸必要な物資を購入した。

(40) 漁協の貯金奨励運動に障害となるという判断による。すなわち、資本を漁協に集中させるために、頼母子講をなくし、変形した形の互助会を作ったと推測される。

(41) 「配当の率は姫では一定。率を決めるのは船主と船長の話し合いで行う。この場合船長は乗組員の代表として行動する。その間にはいって組合が仲介する。」

(42) 「漁の配当は若い人も経験のある人も変わらない。オタガイさまである。自分も小さい時からやったから。」

(43) 船主が船長を兼ねる例は少ない。(2例)「頭重いから。」と言われる。

(44) 「船員を捉すのは船主の仕事。探すのが大変で中島の方まで行った事もある。」

(45) 「かつては何年も同じ船に乗り、家族と同じようだった。戦後は漁のある、なしで乗組員が移る。」

(46) 船の漁の責任は船長にある、とされる。また、「漁は船主の運と船員の運の相性だ。不漁の時は船員をかえて、ツキをかえる。」という船主もいた。

(47) これは血のつながりのあるなしに関係なく行われる。

(48) 「船主になるとツキアイがえらい。」との言葉がある。しかし、この場合シンセキツキアイ、キンジョツキアイに出費が多くなる事で、特に船員との関係によるものではない。また、船主間のツキアイを持つこともその理由である。

(49) ムラ人は、漁協の業績として、問屋と手を切った事により、漁獲物が安く買いたたかれなくなり生活が楽になった事を必ずあげる。

(50) 最近の例では漁場開拓を目的としてオーストラリア領海への調査を行うなど、国家レベルの交渉にも漁業が代表として参加している。

(51) ある漁協職員によれば、「姫の世帯の貯金高、収入、支出は漁協がすべて知っている。」と述べている。

(52) 全国の漁協のうち、姫漁協だけが購売部を持っている。

(53) 他に禁酒運動などが昭和の初めに組合の提唱で行なわれている。

(54) 保育園も当初は婦人会が中心となって設立し、運営していた。現在は町営になっている。」

(55) 「現在の我々の漁業は零細だからダメであろう。…それでもなんとかのりきれそうなのはまとまりがあるからだろう。」という船主の言葉がある。

(56) 「船間の連絡は重要だ。情報を交換し合うと同時にかけひきがあり、互いにライバルだ。」

(57) 1952年、九学会連合能登調査報告書、P 333において、武田良三および外木典夫氏は、姫は藩政末期以降からの来住者による、開発漁民部落とでもいいうる性格を有しており、それが漁撈生産の発展と相まって独立した漁村共同体の形成をみるにいたった、と推測している。

(58) この裏返しとして、好況期における成功も漁協のリーダーシップを裏づけたと思われる。